
張?

侯公講座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

張？

【Nコード】

N9401J

【作者名】

侯公講座

【あらすじ】

後漢末期、アジア全土に、ひいては世界に大きな影響を与えた大事件、後漢の滅亡が間近に迫る。

中華全土を旅する秀才宗爵は黄巾の乱の最中、仕えるべき君主を陳留の討伐軍に見出す。

張？と宗爵は、悲運に見舞われ続けながらも、天命に抗い続ける

一章「宗爵」

風に揺れる草野と、其処を歩く男がいた。男は旅装である。

背に大きな葛籠を背負い、腰に水の入った竹筒を下げているだけの軽装であり、それは、この男の旅路が短いものではないことを示している。

名を宗爵そうしやくという。字は子賜しじ。

宗爵の息は乱れている。彼が宿を発つたのは早朝のことで、歩き続けているうちに、日はもう中天を過ぎていた。宗爵が疲労を覚えるから大分時間が経っている。しかし、宗爵の足取りは乱れていない。旅慣れているのである。疲労に負け、乱れた足取りで進んでいると、重心が定まらず、必然、体勢の維持が難しくなり、余計に体力を摩耗してしまう。乱れた足取りをとるということは、その人の歩みの終わりが近いということでもある。とはいえ、宗爵も超人ではなく、むしろ儒者であるから体力は常人に劣る。疲れた軀に鞭打って歩くのにも限界がきつつあった。

先を見ると、宗爵の膝の高さくらいの高さの岩がある。宗爵は其処まで少し早歩きで行き、岩に腰掛けた。

やっと人心地ついた思いの宗爵は、葛籠から瓢を出し、昼食をとることにした。

米を食んでいる宗爵の思考は四方に飛び、やがて二年前、この旅に出るときの回想に落ち着いた。

宗爵は楚の黔中郡の生まれである。父は劫といい下つ端の捕吏で、母は宗爵を産んだときに、肥立ちが悪かったのか病んで死んだ。今、宗爵は顔も覚えていない。

九つのときに地元の儒者のやっている塾に入れられた。宗劫自身には学問はなく（そのせいで彼は出世できないのである）、彼の学問への憧れと、通常いるはずの家族が一人足りないことで生じた金銭的な余裕が、宗爵を塾に通わせる基盤になっている。

塾に入つてすぐに、宗爵はこの塾に飽いた。自分に並ぶ生徒がいなくなつてしまつたのである。宗爵は或る特技を持つていた。宗爵は一度読んだ本の内容を一言半句間違えずに記憶できるのである。しかし、宗爵は自分にこの特殊な能力が備わっていることを、入塾するまで知らなかつた。宗劫が本を買い与えなかつたからである。宗劫は一通りの読み書きを知つていたが、本は読まなかつた。それが宗爵から本を読む機会を奪つていたのであるが、入塾してから、宗爵は気の狂つたように本を読み漁つた。何分、田舎のちっぽけな塾であるからあまり量はなかつたが「論語」や「孟子」などの儒教の聖典から、「周礼」や「易経」などの、実用的な礼法の本まで読んだ。

特に、宗爵が気に入つた本は「論語」であつた。

宗爵は「論語」を通して孔子と対話している気になつた。

塾にある全ての本を読み、その内容は全て覚えてもなお、宗爵は本を読むことをやめなかつた。宗爵は字をみて、筆者の性情を想像することに楽しみを感じ始めていた。

やがて、宗爵は田舎儒者の手に負えなくなつてきた。宗爵の知識は膨大になるばかりで留まることを知らず、この田舎儒者を超えてしまつたのである。

宗爵は遊学に出ることになつた。宗爵はこのときまだ成人していない。

古代の成人は二十歳ではなく十二歳であり、宗爵は十一歳だつた。入塾して僅か二年しか経つていないが宗爵は「論語」「孟子」「周礼」「易経」「春秋」「詩経」などを暗誦できた。神童といつて差し支えない。

宗爵が向かつたのは青州の北海、後漢末期の大儒、鄭玄じょうげんのもとで

ある。

田舎儒者は鄭玄の元で数年、学んだことがあった。その伝手で、宋爵のことを伝えたところ、この大学者は宗爵を引き受けてみる気になったのであった。

宗爵は父親に見送られて、黔中郡を発った。実は、この後、宗爵が故郷に帰ることはなく、宗劫とは、これが今生の別れとなるのである。宗劫は宗爵が鄭玄の下に行った後も、変わらずに学費を送り続け、それは遂に宗劫が死ぬまで、途絶えることはなかった。死んだ妻の面影を残す宗爵を、過度に愛したのである。宗劫の名が竹帛に記されることはなかったが、宗爵の無二の父親であったことは間違いない。

「達者でな」

宗劫の声は慈愛に満ちている。

「お前はわしみたいたいになつてはならん。学問をしる。智は、力よりも強い。必ずお前の人生を助けてくれる。」
それが、父子の別れの言葉であった。

二章「鄭玄」

鄭玄は後漢を代表する学者である。鄭玄を知らずに儒学を語ることは出来ないだろう。

鄭玄の八世前の先祖を鄭崇といい、尚書僕射まで昇った。しかし、鄭玄の代では家名も落ち、彼は故郷で小役人をして生計を立てていた。

貧困の中、鄭玄はしかし其処に日常性という安息を見出すことはしなかった。鄭玄はむしろ、其処から脱しようとした。鄭玄は儒学を学んだ。これは、儒者になることが出世の近道と思っただけではなく、鄭玄の密かな先祖に対する憧憬が、彼を学問の道に進ませたのであろう。生計を切り詰めながら、鄭玄は情熱を失うことなく学んだ。

その努力は筆舌に尽くしがたい。貧困の中の学問はよく小説などの舞台になるが、実際は辛酸をなめるような苦痛である。食をとるか学をとるかという究極な二択に常に迫られながら、人生の深奥を考えるのである。鄭玄は栄養不足から墨を口に運ぼうとするまでになった。

鄭玄は学び続けた。其の中で浮き上がってきた疑問があった。儒教の宗派の多さである。一つの宗派は一つの経典を、師の教えに従って研究する。そのことが鄭玄には理解できなかった。

学問は自分一人では知ることの出来ない大きな世界を知り、その世界を生きる術を知るためのものであると鄭玄は思っている。

一つの学説に固執していて、果たしてその世界は見えてくるだろうか。所詮、一人の人には一つの脳と二つの目と耳がついているだけであり、その生涯は五十年もあればいいほうである。一人の人間が世界の全てを知ることはいない。

そう思った鄭玄はどんな文章においても、できるだけ多くの人の見解を聞くことにした。それは「定見なし」と罵られることもあつ

たが、気にはならなかった。

やがて二十二歳の時、鄭玄は現在の大学に当る太学に進んだ。

しかし、太学での学問は鄭玄には足しになることはなかった。結局、太学の学生も教師も、鄭玄を罵った人と同じ、学説に固執する人であったからである。

むしろ、鄭玄を喜ばせたのは、太学の学生となったことで、馬融など有名な大儒に直接、教えを請えるようになったことである。特に、鄭玄は馬融を尊敬した。

馬融は不屈の人である。馬融は二度、時の権力者に従わずに官界から追放されている。一人は後漢中期に善政を布いた？太后であり、もう一人は後漢最悪の外戚の権力者、梁冀である。しかし、馬融が自分の学問を止めることはなく、後、病を発して議郎を引退するまで、彼は儒学の深奥に迫り続けた。馬融の盛名を慕ってその弟子となった者は数千を数えた。

馬融が鄭玄に教えたことは「自由」ということである。この場合の自由とは、現在の意味から離れ、「自に由る」ということである。鄭玄は太学に入るまで、様々な学説を聞き続け、覚え続け、考え続けた。しかし、その学び方には限界がある。一つの学説には必ず、それに対抗する学説がある。そして、その学説にもまた、対抗する学説が存在する。それはいたちごっこのようなもので、学問の宿命といえる。鄭玄が旧の学び方を続けていくと必ず、その矛盾にあたり自分というものを見失ってしまうのではないかと、馬融は思った。鄭玄は馬融に一旦、築き上げた「自己」を破壊された。そこから、新たな自己を作り上げることが鄭玄に課せられた。

それを見事に成し遂げた鄭玄は、やはり秀才であった。馬融の目に狂いはなかったのである。

その後鄭玄は党錮に連座して以来、官界を離れ、弟子の教育と、著述に専念することとなったが、宗爵が鄭玄の元を訪ねたのはその時である。

宗爵は鄭玄を一目見て

「大きい人だな…」

と感じた。

鄭玄は巨軀ではない。しかし、満身から発せられる気に、宗爵は圧倒された。

人には序列が在るということを、改めて宗爵は感じた。もし、自分が今剣を持っていたとしても、その切っ先は鄭玄を貫くことにはできないだろう。鄭玄に一喝されてなお、剣を取り落とさずに持つて居れるとは思えない。武を奮うだけが、人の力ではない。むしろ、武より大きな力が、鄭玄にはあり、それは世間では「徳」とか「威」というものであるが、しかし宗爵は鄭玄が自分を威圧しているとは感じなかった。むしろ巨きな手で包まれたような、優しさにも似た感触であった。

「字は」

何というのか。そう問うただけであったが、宗爵にとってその声は大地を震わす声であった。

「子賜といいます。父につけられました。」

「ふむ、宗子賜か。大いに学べよ。」

鄭玄との会話はそれだけであったが、宗爵は、この会話が絶対に自分にとって大いに有為なものとなったことを確信していた。

宗爵は鄭玄の元で十年間学んだ。十年目に、宗爵は旅に出ることを決意するのである。

三章「宗爵、発つ」（前書き）

二字でタイトルを考えることに限界を感じた。
宮城谷先生マジすげえと思った。

三章「宗爵、発つ」

宗爵が鄭玄のもとで学び始めてから十年後。宗爵は鄭玄門下百人を超す弟子の中で、尤なる一人になっていた。

これは鄭玄が、宗爵のひたすらに知識をため込むという学び方を正し、むしろ知識にとらわれない黄老的な思考を、宗爵に身に付けさせたことが大きな由来である。鄭玄の師である馬融が、必死に他者を知ろうとする鄭玄に教えたことでもある。

鄭玄の元に来てから、宗爵は、簡単にいえば知識を選んで捨てるようになった。取捨選択を自分で行えるようになったのである。溜め過ぎた知識は、自分を縛り殺すことを知ったということでもある。そして、二十二になった宗爵が望んだことが

旅に出たい。

ということであった。

孔子も孟子も荀子も人生の中で、各々理由は違えど、旅をしている。

宗爵は、儒教の聖人である（荀子を聖人と仰ぐ人は少ないが…）その三人に憧れ、彼らと同じことをしてみても初めて、分かることがあるのではないかと思っただのである。

また、宗爵は鄭玄の教えを受けて以来、机上の学問というものを軽蔑するようになっていた。

僅か、一尺四方もない机に向かって、必死に広大な世界を知ろうとしている学友が滑稽なもの映るようになった。

もっと色々なものを見聞きして、色々な世界を知りたい。宗爵の知識欲は空をも覆わんばかりに膨れ上がっていたのである。

鄭玄はこの宗爵の急激な心の変化、溢れんばかりの気概と停滞への恐れの入り混じった複雑な、成熟し切らない気持ちのありようが、若さと経験不足からくる、単純な情緒不安定に因るものではなく、天賦の才に恵まれた才子が、一個の人間としての自分を見失いかげ

て、自分の価値観や、生まれ持った才能すら捨て去らなくてはならなくなり、そこで、今と昔で見えていた風景や自画像に、余りに大きな落差が付いてしまったことに因る、（それを乗り越えることによって）未来へ成長を伴った、突発的な心の衝動なのだろうと感じた。宗爵の抱いた欲求から、宗爵の心理状態や、越えなければならぬ課題までも見透かせる鄭玄は、人生の達人といふべきだろう。

故に、旅に出たいといった宗爵に、鄭玄は反対しなかった。

しかし、一つ、懸念がある。それは、旅中の遭難についてである。時は霊帝の一六年、紀元でいえば一八三年、元号でいえば光和六年である。

この翌年、中華全土を、アジアを、更に言えば世界の歴史を変えるきっかけとなった大事件が起こる。

中華史上最大の農民一揆「黄巾の乱」である。

黄巾の乱とはどんなものであったか。

太平道という、道教の一種が後漢末期に誕生した。教祖を張角という。

もともと、呪いで病を言い当て、それを癒すという、ありがちな宗教であったが、悪政に喘ぐ窮民の心の支えとなるにはそれだけで充分であった。徐々に信者の数は増え、遂には中華の東のほぼ全域にまで広がった。信者の数は百万をゆうに超え、教祖の張角は、この力を使えば、やせ細った病人のような後漢王朝を倒し、新しい、太平道の王朝を作れるのではないかと密かに思い、実際にそれを計画した。その計画を実行に移したものが黄巾の乱である。

ではなぜ「黄巾の乱」というのか。中国には五行説という思想がある。そのなかで、土を表す黄は、木を表す青に克つ色である。

後漢は木徳、つまり青色の王朝であったから、張角は信者に黄色い巾を頭に巻くように指示した。これが、黄巾の乱の名の由来である。

さて、宗爵が旅に出ることを決意した一八三年に、まだ黄巾の乱は起っていないが、すでに、不穏な空気は漂い始めていた。民衆と

は敏感なもので、張角は秘密裏にことを進めていたはずだったが、すでに民草の間で太平道の拳兵は近いと、もっぱらの噂であった。知らぬは王朝の顯官ばかりであったのである。

在野の賢人である鄭玄が、その空気を感じ取れないはずがない。

「一人旅はあまりにも、危険だ。」

鄭玄はそう忠告した。

「だれか、同行者を連れていったほうがいい。孫乾か衛茲か…汝とともに学べそうなものを選んでやろう。」

と、鄭玄はに最大級の思いやりを示した。宗爵はこの師の、この氣遣いように思わず涙が出る思いであったが

「恐れながら、孔子は匡において抑され、陳において飢えさせられました。また孟子もまた、桀宋に追われております。どうして、この宗爵ごときが危難の来たるを恐れられましょうか。」

宗爵は師の厚意を断った。

「そうか…ならば何も言うまい。勝手に行け。」

鄭玄は突き放したような言い方をした。しかし、ここまで堂々と弟子に氣遣いを無視されて、怒ることのない鄭玄というの器は、いったいどれほど広いのだろうか。どんな人でも、目下のものに生意気を言われれば腹が立つものである。やはり鄭玄は、希代の人なのである。

宗爵は旅立った。見送ったのは学友であり宗爵とも親しかった、先に鄭玄が旅の道連れとして名を挙げた孫乾と衛茲、そして鄭玄の三人である。

出発するとき宗爵は年長の衛茲に

「これが今生の別れかもしれませんね。どうか御達者で。」
と、別れの辞を口にした。衛茲はそれを冗談ととったのか、笑っただけであった。まさか、のちにこの二人が同じ主の元で顔を合わせようとは、つゆほども思わなかった。

宗爵には、具体的な旅の目的地はなかった。二年間で宗爵は西は旧秦から北の敦煌、そして遼東半島まで、ほぼ中華全土を周った。

旅の間に、黄巾の乱が起きた。幸運にも、宗爵が巻き込まれることはなかった。

そして、物語は冒頭に戻るのである

宗爵が今居るのは、陳留北部である。

この辺りは黄巾の勢力が強いため、政府軍と黄巾軍の戦が多く、今宗爵が腰かけている岩のそばにも、黄色い直垂をつけた髑髏がいくつも転がっている。

初めは髑髏など、目にするたび気が塞がれていた宗爵も、もうすっかりこの風景に慣れ、このそばで飯を食うことも、なんとも思わなくなっていた。

それがいいことか、悪いことか、判断することはできまい。宗爵はそんなことを考えることすら無駄だと割り切っていた。

ふと、宗爵が西に目を転じると、馬軍が見えた。遠目にも黄色は見えないから、おそらく政府軍であろう。それにしても、規模が小さい。

本隊とはぐれたのかな。

そう思った宗爵は、岩から動かなかった。自分は儒者である。軍におびえてどうするという気概と、鄭玄の名を出せば略奪されたりはしまいという打算が、瞬時に胸の中で働いた。土煙を巻き上げながら近づく馬群を、ほとんど警戒することなく迎えようとしていた。

宗爵にとって、運命の時が近づいているのであるが、それはきつと天のみぞ知ることであつたのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401j/>

張?

2010年10月8日14時24分発行